2004-4-①

2004年(平成16年) 1月23日(金曜日)

読物文化

姜尚中・宮台真司著

挑発する知

国家、思想、そして知識を考える

46判・248頁・1800円
双風舎
4-902465-00-0

◇共鳴しあう対談◇

誰もが触発される、価値ある一冊

橋爪大三郎

姜尚中と宮台真司。話が合わないのではと思われようが、意外にも対談が共鳴しあっている。宮台氏が敬意と気づかいで姜氏に接しているためもある。そして何より、共通項がある。二人とも、既成の観念を組み換え、新しい場所へ出ようと果敢に格闘しているのだ。

話題は多岐にのぼる。まず九・一一以降のアメリカの変容と、日本の思考停止状態。宮台氏はネオコンの登場を、グローバル化する時代の必然的な文脈に置き直す。《今後も…資本と労動力の流動性が高まる…。…いろいろな国籍の人たちが日本に入ってきます。…セキュリティ不安の理由が彼らに求められ、私たちが培ってきたリベラルな政策の流れを阻害するような措置が続々ととられると思うのです》(23頁)。この切迫した実態を見つめるところから思考がスタートする。

「親米愛国」も、二人にとって、思考停止のもうひとつのかたちだ。それは、戦後の状況を固定化し、さもしく生き延びようとする鈍感さの別名だ。アメリカは日本のために存在するわけではない。世界の国々おのおののありのままとじかに向き合うところから、おのずからなる共感と弱者連合の構想がうまれる。宮台氏はこれを《アジア主義》とよぶ。つぎに、右と左。《右翼と左翼というわけ方自体、いまはまるで意味をなさなくなっているとも思う》(77頁)と、姜氏が言う。宮台氏は、左翼を《解放的関心を貫徹しようという志》、右翼を《世界は理屈では割り切れないとする断念》と定義し、《私は、左翼であり右翼です》(83頁)と結論する。

国家に対する新しい感覚も、二人に共通する。国益を国民益と考え、国民の利害と別の「国家」独自の利害を認めない。そこから、国民国家を自分たちの手でハンドルしていこうというプラグマチックな志向がうまれる。「想像の共同体」だと国民国家を批判し、何か言ったつもりになっているのは、どうしようもない知的怠惰なのだ。

ここで改めて課題となるのは、ナショナリズムとデモクラシーの結合だ。この文脈で、姜氏と宮台氏は、丸山眞男を批判的に再評価する。丸山は、日本社会の共同体的原理とデモクラシーの作動条件を冷静に考察した。半世紀を経たいま、その課題を受け継ぐべきだと二人は考える。姜氏は、《宮台さんこそ、現代における丸山眞男のもっとも卓越した後継者である》(あとがき)とまでのべる。

宮台氏は、《ミドルマン》として、自分の役割を説明する。啓蒙的知識人は、実のところ、知の権威と迷妄な大衆を生産してしまうが、ミドルマンはその反対に、大衆の目線から、知の権威を溶解させるような語り口をもつ。人びとのつくる国家・社会が、《知のエキスパート》たちの活動によって機能的に支えられるために、必要な語り口なのだ。

対談ゆえ、話の焦点はゆれ動き、内容を正確につかむのは実はむずかしい。それでも、誰もが触発される、価値ある一冊である。(はしづめ・だいさぶろう氏=東京工業大学教授・社会学専攻)

★かん・さんじゅん氏は東大教授・政治学・政治思想史専攻。早大大学院博士課程修了。近著に「マックス・ウェーバーと近代」「反ナショナリズム」「日朝関係の克服」など。一九五〇(昭和25)年生。

★みやだい・しんじ氏は東京都立大助教授・社会学専攻。東大大学院博士課程修了。近著に「援交から天皇へ」「憲法対論」「絶望から出発しよう」「ニッポン問題」など。一九五九(昭和34)年生。

2004・4-④

学術思想

アメリカの本質に迫る

サミュエル・ハンチントン著

分断されるアメリカ

ナショナル・アイデンティティの危機

長期的な動向を予想する 課題に向けた基礎的作業

矛盾の根源にあるグローバル化

橋爪大三郎

世界がますます結びつきを深め、単一の市場に統合され、文化が相互浸透していく。このグローバリゼーションの流れのなかで、アメリカの存在が突出したものになっている。圧倒的な軍事的優位を誇り、英語を事実上の世界共通語とし、科学・技術・文化をリードしているアメリカ。だがそのアメリカも、長期的には覇権国の座をずり落ちていくだろう。それまで当分の間、アメリカの一挙手一投足に、世界が振り回されることになる。

アメリカは、では、どういう国家なのか。『文明の衝突』で、ポスト冷戦の世界を予言してみせた国際政治学者のサミュエル・ハンチントンが、アメリカの本質に迫り、診断を下す。

本書『分断されるアメリカ』は、ここ一〇年ほどのあいだに出版されたアメリカについての重要な研究書や論文を網羅的に参照し、ゆれ動く《アメリカ人のナショナル・アイデンティティ(国民としての自己認識)の……変化を扱っ》ている(はじめに)。

注目すべき論点は多々あるが、まず、アメリカが西ヨーロッパ諸国と異なるという指摘が重要だ。本書の紹介する一九九〇年のデータによると、アメリカは「暮らしのなかで神の重要性を高く位置づける」人びとの割合が八〇%近く。イギリスの四〇%、フランスの三〇%とは比較にならない。ちなみに日本は、二〇%。アメリカは今日でも、プロテスタントの信仰を基盤にした「宗教国家」なのである。

ハンチントン

ついで、九〇年代以降、アメリカの求心力が低下しているという指摘。これまでアメリカに移民してきたさまざまな集団は、英語を学び、アメリカの文化と価値観(アングロ・プロテスタント文化)に同化してきた。けれども、メキシコからの移民など低所得のヒスパニック系住民は、英語のかわりにスペイン語を話し、同化を拒んでいる。また、グローバル化した世界を舞台に活躍するエリート層も、アメリカへの帰属感を弱め、上と下から分裂の傾向を深めているというのがハンチントンの分析だ。九・一一事件は、一時的にアメリカ人の愛国心を高めたが、この先どうなっていくかはわからないという。

ハンチントンは、アメリカの過去・現在を踏まえ、今後に三つの可能性が開かれているという。第一は、世界主義的な行きかた。世界がそうであるように、アメリカも多様化するし、多様化すべきであるとする。第二は、帝国主義的な行きかた。アメリカの文化と価値観は普遍的であり、しかもアメリカは強力である。世界はアメリカの価値観を受け入れるべきだとする。第三は、ナショナリズム的な行きかた。アメリカは世界と違う。どちらがどちらかに同化するのでなく、並存すればよい。アメリカらしくなはさらにアメリカらしくなっていくべきだとする。

いまのアメリカは、たしかに、この三つの要素がからまっているようにみえる。アメリカは最近、ナショナル・アイデンティティを見失い、それを再構築しようと努力している最中なのだ。イラク戦争の際に顕著にあらわれた単独行動主義も、こうした矛盾が招いたものだと考えると理解しやすい。

アメリカに内在する矛盾を理解し、アメリカの長期的な動向を予想することは、世界の国々にとって重要だが、それ以上に、わが国にとって優先順序の高い課題である。本書はそうした課題に向けた、基礎作業になっている。

信仰の自由をかかげたプロテスタントの共同体は、世界に無関心なローカルなアメリカの基層をなし、独立と南北戦争は、連邦への忠誠とナショナリズムをかき立てた。こうして世界から孤立していたアメリカが、世界と緊密に結びついてしまったグローバル化は、アメリカにとっても矛盾の根源なのである。(鈴木主税訳)(はしづめ・だいさぶろう氏=東京工業大学教授・社会学専攻)

★サミュエル・ハンチントン(一九二七~)はハーヴァード大学教授・国際政治学専攻。著書に「文明の衝突」「引き裂かれる世界」など。

46判・586頁・2940円
集英社
4-08-773405-6

『たったひとりのクレオール』という１冊(無料宣伝リーフレット) p2-7 2004-4 ②
ポット出版 2004.1.31 発行

聴覚障害の実態やそれをとりまく社会的文脈、聴覚口話法の意義と限界、障害者の自己形成などを、体系的に論じた書物

●橋爪大三郎
東京工業大学教授

まったく違った分野の専門書であるのに、ぐいぐいひき込まれ、強い印象を残す書物がある。たとえば、秋元波留夫氏の『失行症』（一九三六年初版、一九七六年再刊、東京大学出版会）。上農正剛氏の新著を手に取って、ずっと以前に読んだこの本のことを思い出した。

秋元氏は一九〇六年生まれ。医師として北海道に赴任し、炭鉱の事故から救出された患者を多く診療した。一酸化炭素中毒の結果、奇妙で独特の症状を呈する患者が多くいる。ものの形が認識できなかったり（失認）、言葉の意味がわからなくなったり（失語）、特定の行為ができなくなったり（失行）。中毒により大脳が局部的に損傷を受け、それに対応する機能が障害されたためと考えられる。逆に考えるなら、健常者の大脳が、どれだけの局部にわかれていて、それぞれどういう機能を分担しているかを、そこから推測することができるわけだ。

秋元氏は、現場の診療を通じて失語、失認、失行といった病態にふれ、欧州の最新の研究を参照しな

及ぶ。精神機能はもともと障害されていないのに、その発達に問題が起こるのを見過ごすことは、ゆゆしい問題、まさに人権問題である。

聴覚障害児には、とりあえず、二つの道しかなかった。第一は、音声言語をあきらめ、手話をコミュニケーション手段に選ぶこと。これは、聾者として生きることを意味する。第二は、困難をおして、音声言語を習得する道を選ぶこと。それには補聴器をつけ、唇のかたちを読み取り、発声練習を繰り返すという、ハードな訓練を重ねなければならない。

実際にはどちらも、大きなマイナスをともなう。手話を身につけても、手話ができるとは限らない親や一般の人びとと、自由にコミュニケーションができるわけではない。手話（日本手話）は、日本語と語彙や文法が異なる。日本語と対応のつかない、もうひとつの言語（外国語）なのだ。したがって、漢字やひらがななど日本の文字言語も、容易には身につかない。聾者同士が語りあう、孤立した手話の言語共同体に閉じ込められてしまう結果となる。かと言って、音声言語を選択しても、現実の状況で聴き取りや発話ができるレベルにまで、音声言語を身につけることはむずかしい。そして、この困難をどうにか乗り越えたとしても、聴者の世界に対等なメンバーとして受け入れられるわけではないのである。

それならば、なるべくマイナスを小さくするために、両方を身につけるしかないのではないか。聾学校は、そうした環境と訓練を提供するものであるべきだろうと思う。

ところが、日本の聾学校は、手話の使用を禁止してきた。上農氏にお目にかかった八年前にこのことを確認して、私は改めて怒りをおぼえた。日本語の習得に邪魔になるからという。手話への偏見もあるかもしれない。聴覚に障害をもって生まれた子どもたちは、障害そのものに加えて、不十分で非科学的

から、症状の分類や診断基準、その発生の機序や治療方法をひとつずつ考え進めていった。特に、構成失行（マッチを擦ったり、パジャマを着たりといった種類の動作だけができなくなる）という障害のメカニズムを再構成するところなどは、議論の進め方にわくわくした。ひらがなや漢字が別々に失われるといった日本語特有の失語症の症例を報告分析したことも、大きな貢献だと敬服した。

上農氏の書物も、未踏の領域に踏み入って、病態の根幹を見極め、それに即した合理的な体系を組み立てていこうとする明快な意志に貫かれているところが、秋元氏とよく似ている。

上農氏が扱うのは、聴覚障害児である。出来あがった機能が途中から失われる場合（失行症）と、最初から失われている場合（聴覚障害）では、だいぶ事情が異なる。聴覚障害にもかかわらず、どのようにして、それ以外の機能を十分に発達させるか。この方法をめぐる思索の格闘が、本書のなかみである。

一般に見過ごされがちなことだが、視覚障害にくらべて、聴覚障害のほうが問題はむしろ深刻である。視覚障害児（目が見えない子ども）は、生活上の不便はあっても、親とのコミュニケーションに問題がない。親は音声言語で、コミュニケーションを行なっている。視覚障害児は、その言語共同体に参加し、音声言語を通じて精神を形成し、教育を受けることができる。困難が生ずるのは、文字言語を使おうとしても目に見えないので使えない段階、すなわち学齢に達してからである。それ以前に、音声言語を習得し、それを媒介にして情緒や人格を形成することができる。

聴覚障害児（耳が聞こえない子ども）の親は、ほとんどが聴者（健常者）である。親の用いる音声言語を、子どもは聴くことができない。聴覚障害児は、親と言語コミュニケーションを行なうことができず、言語共同体に加わることができない。言語が獲得できなければ、情緒や人格など精神形成に大きな影響が

な教育環境をも耐え忍び、そのもとで苦しまなければならないのである。

その聾学校の生徒数が、急激に減少しつつあるという。補聴器をつけて音声言語を聴き取り、音声言語を発音する「聴覚口話法」にもとづいて、一般の学級で学ぶインテグレーション（インテ）教育が一般的になったからだ。子どもの「聴こえない」現実を認めたくない親たちや、聴覚口話法をよかれと推進する教師たちによって、インテ教育が推進されている。聴覚障害児の言語能力は、一般の学級の「自然な環境」で、無理なく習得されるはずだった。だが現実には、言葉を聞き取ることができず、クラスから疎外され、勉強にもついていけないという大部分の聴覚障害児たちの実態がある。そしてそれは、とりかえしがつかなくなるまで放置されているのだ。

上農氏は、聴覚障害児の教育指導に長年取り組み、数多くの障害児たちや親たちの苦しみ、聴覚口話法の矛盾、聾教育の実際を見てきた。本書は、そうした経験を踏まえて、聴覚障害児教育の根本的な見直しを提案する、画期的な書物である。言語学や哲学の知見が随所に織り込まれ、時間をかけて温められたアイデアがくっきり打ち出されている。聴覚障害児をもつ親たちや聴覚障害児を教える教師たちはもちろん、聴覚障害者本人、言語や障害や福祉に関心をもつ人びとすべてにとっての、必読書であると思う。聴覚障害の実態やそれをとりまく社会的文脈、聴覚口話法の意義と限界、障害者の自己形成などを、これほど体系的に論じた書物は、おそらく初めてなのではないか。

聴覚口話法の問題点とは何だろう。聴者が大部分のクラスで意思疎通ができず、孤立していく。授業がわからず、学力が停滞する。親とのコミュニケーションもうまくゆかず、家族としての交流が十分でない。「自然な環境」を重視する結果、躾けや社会的訓練がおろそかになる。どれもその通りである。

2004年（平成16年）12月17日（金曜日）　第2567号
週刊読書人

2004-4-⑥

印象に残る人文書

橋爪大三郎

加藤典洋のテクストから遠く離れて『講談社』『朝日新聞社』別々の版元から、アの字で出ている三冊は、九〇年以降の日本の小説に対して、まともに向きあった理論と実践編という趣きになっている。

本格的な批評の試み。

加藤氏が注目し、取り出したいろいろは、いわゆる小説の表現、アイロニーである。手法はやや異なるが、先の三冊と合わせて読めば有益であろう。

（はしづめ・だいさぶろう　氏＝東京工業大学教授・社会学専攻）

アンケート特集

一〇〇冊の教養

ストーリーが前提する「作者の死」を意識しつつ、なお、テキスト「破り」の作品の構造である。大江健三郎の「取り替え子」に対し、阿部和重の『シンセミア』は、作者が、作品のなかに織り込まれている。設定書簡が、それぞれ読むが、管理が、作品の構成に組み込まれている。作品の構念を変容させた点、明治制度が、揺さぶられている。それが、この社会のある奇妙な感覚を明らかにしている。

う感覚が、興味深かった。

精神科医・斎藤環の『文学の徴候』（文藝春秋）も、ほぼ同時期の作品群を対象にアーチする。手法はやや異なるが、先の三冊と合わせて読めば有益であろう。

（はしづめ・だいさぶろう　氏＝東京工業大学教授・社会学専攻）

だがとりわけ上農氏が強調するのは、人間精神の発達にとって、言語の運用能力の獲得が本質的に重要であること、そして、聴覚口話法のみによっては、その能力が決して十分に身につかないことだ。

そこで上農氏は、聴覚口話法とは別に、言語の運用能力を獲得することが大切であると説く。それが、書記言語（文字の読み書き）の重視であり、手話言語の重視である。聴覚障害者は、自覚的なバイリンガルの学習者として自己形成するのが正しい。少なくとも一種類の言語を、人生の早い時期に、十分に使いこなせるようになること。精神の発達にとって、このことは本質的である。そして、聴覚口話法では、これは不可能なのだ。

見知らぬ異国に移住した親たちが、不完全なカタコトの外国語（ピジン）をしゃべっていたとしても、それを聞いて育つ子どもたちは、それを流暢なもうひとつの母語（クレオール）に変えてしまうという。子どもたちには、障害を乗り越えて進む内発的なエネルギーがそなわっている。『たったひとりのクレオール』というタイトルには、聴覚障害児の孤独と、それを見つめる著者の希望に満ちた激励の視線とがこめられている。

（書き下ろし）

はしづめ・だいさぶろう
一九四八年神奈川県に生まれる
東京大学文学部社会学科卒業、同大大学院社会学研究科博士課程修了
一九八九年より東京工業大学に勤務
現在、同大大学院社会理工学研究科価値システム専攻教授

●著書
『言語ゲームと社会理論』（勁草書房）
『仏教の言説戦略』（勁草書房）
『はじめての構造主義』（講談社現代新書・講談社）
『冒険としての社会科学』（毎日新聞社）
『現代思想はいま何を考えればよいのか』（勁草書房）
『民主主義は最高の政治制度である』（現代書館）
『僕の憲法草案』（ポット出版、共著）
『橋爪大三郎コレクション（全3巻）』（勁草書房）
『性愛論』（岩波書店）
『橋爪大三郎の社会学講義』（夏目書房）
『橋爪大三郎の社会学講義2』（夏目書房）
『選択・責任・連帯の教育改革【完全版】』（勁草書房、共著）
『こんなに困った北朝鮮』（メタローグ）
『言語派社会学の原理』（洋泉社）
『天皇の戦争責任』（径書房、共著）
『幸福のつくりかた』（ポット出版）
『世界がわかる宗教社会学入門』（筑摩書房）
『政治の教室』（PHP新書・PHP研究所）
『「心」はあるのか――シリーズ・人間学❶』（ちくま新書・筑摩書房）
『人間にとって法とは何か』（PHP新書・PHP研究所）
『永遠の吉本隆明』（洋泉社新書y・洋泉社）、などがある

週刊読書人

毎週金曜日発行
定価　230円
本体　219円

株式会社 読書人 発行
東京都新宿区矢来町109
郵便番号162-0805
電話　03(3260)5791(代)
FAX　03(3260)5507
振替口座　00150-9-57070
前金購読料50週11500円
http://www.dokushojin.co.jp
©株式会社読書人2004

鶴見俊輔・上野千鶴子・小熊英二著『戦争が遺したもの』を読む

戦後思想史の舞台裏

特異な履歴と背景

橋爪 大三郎

上野千鶴子・小熊英二の両氏が、哲学者・鶴見俊輔氏に戦中から戦後にかけての経験を聞いた『戦争が遺したもの――鶴見俊輔に戦後世代が聞く』が新曜社から刊行された。生立ち、アメリカでの投獄、八月十五日の経験、『思想の科学』の創刊、丸山眞男との交流、「転向」研究、六〇年安保、ベ平連と脱走兵援助など、まさに興味の尽きない内容となっている。橋爪大三郎氏に書評を寄せてもらった。（編集部）

上野　千鶴子氏

鶴見　俊輔氏

小熊　英二氏

こどもの読書週間・2004　4/23～5/12

戦後の知識界にくっきり足跡を残した鶴見俊輔氏に、気鋭の思想史家・小熊英二氏と、かねてから鶴見氏への敬意を隠さない上野千鶴子氏とがインタヴューする。前後三日間に及ぶ聴き取りを通じて、戦後史の舞台裏に新たな光があてられた。

そもそもこの企画は、小熊氏の強いイニシアティブで始まったという。『〈民主〉と〈愛国〉』で、戦後の知識人群像を新鮮な筆致で描きおえた小熊氏が、なかでもとりわけひかれた〈鶴見氏の経験をお聞きすることを思い立った。〉そこで、上野氏に〈共同で…聞き取りを行なう案を持ちかけた。…結果としてこのプランは、予期以上に成功した。〉（小熊氏による本書まえがき）

いま鶴見氏に小熊氏がインタヴューすることに、どのような必然性があるのだろうか。〈戦争体験は、もはや経験者が語り継ぐものではなくなり、それをまったく知らないものたちが再構成して引き受けるほかないものになった。〉（上野氏による本書あとがき）戦争ばかりではない。六〇年安保にせよ、全共闘にせよ、戦後日本社会のさまざまな実相もまた、戦争が輪郭を失っておぼろげになっていくにつれて、意味がつかめないものになっている。こうしたあいまいなものを総体としてつかみたいという切実な動機が、小熊氏とその読者たちをつき動かしていよう。

鶴見氏は彼の証言を、特異な家族履歴から説き起こす。母方の祖父が明治の有力政治家の後藤新平。父親は著名な自由主義者で同じく政治家の鶴見祐輔。しつけの厳しい母親に反抗して「不良少年」となり、みかねた父親に十五歳でアメリカ留学に送り出される。ハーヴァード大学で言語哲学を学び、無政府主義の嫌疑で投獄されるも卒業を許される。日米開戦のあと交換船に乗って日本に戻る。海軍軍属に志願してインドネシアに勤務。病をえて帰国し終戦を迎える。英語はできるが日本語がうまくないという類まれなタイプの知性が、こうして活動を開始する。

このような特異な履歴と背景が、鶴見氏の独特なスタンスを裏打ちしている。まず、日本的知識人への徹底した不信。父に代表される「一番病」、時流に合わせて模範答案を書き続ける日本の学校秀才たちに対する批判と反骨の気概が、鶴見氏を支え続けた。そのため〈逆に、庶民を過剰に持ち上げる傾向がある〉と、上野氏に釘をさされるほどだ。第二に、アメリカへの愛憎なかばした距離感。アメリカを深く理解し、そこに住む人びとに敬意を払うゆえに、アメリカ国家には幻想をもたず警戒を怠らない。第三に、既成の組織に属さず体制の外に身をおくこと。繰り返し教職を辞し、思想の科学、声なき声の会やベ平連といった任意団体に深くコミットする。こうした、誰もが真似ようにも真似のできないスタンスが、戦後の知識界に鶴見氏の揺るぎない位置を与えた。

「ヤクザの仁義」というキーワードが頻出する。組織やイデオロギーにとらわれないで自由自在に動く鶴見氏が、折々に結ぶ同志や好敵手との固い絆のことである。これは、自決した三島由紀夫や江藤淳を〈いい奴〉とのべる感度や、弱くて負ける側に自分もいるべきだという氏の〈倫理的原則〉にも通じる。また、〈大切なものは、あいまいな、ぼんやりしたものだ〉という氏の〈方法以前の方法〉や、〈ある時代の思想を…当時のところ…に戻って考える〉「日付のある判断」の重要性など、鶴見氏の秘密の数々が、縦横な座談のなかから種明かしされていく。

編集者精神の共和

さて本書は、小熊氏の『〈民主〉と〈愛国〉』の延長戦とも言えるが、この試みは成功したのだろうか。

本書は、小熊氏の方法論によっている。理系の出身で、編集者も経験し、団塊の世代から「遅れて」やってきた小熊氏。それゆえの「初めて読む、膨大に読む、徹底的に読む」という方法は、読まれる対象に、同時代ではなく過去のもの、追体験し再構成すべきものとして出会うという、思想史のスタンスを明確にしている。戦後社会を対象化し、距離を置こうとする強固な意志がある。

テキストを読解する場合には明快なこの方法論が、本書のような〝座談〟では破綻しないのか。ひとつには、小熊氏の編集者精神、もうひとつには、『〈民主〉と〈愛国〉』の独特の仕掛けによって、歴史的価値の高い証言を取り出すことに成功したと言えよう。

後者については上野氏が、〈これまでの戦後史の書き手がだれも思いつかなかったひとつの仕掛けが仕込まれていた。それは、語られない戦争体験を光源として、ひとりひとりの戦後思想家の思想を照らし出してみよう、というものだった。〉と、的確にまとめている（あとがき）。ひとつの焦点を設定することで、膨大なテキストを内的秩序によって配列することが可能になり、歴史を構成することができるのだ。

語られない体験は、無意識となって、思想の隠れた構造をつくりだす。戦争体験は、戦後という時代の無意識の別名かもしれない。われわれは、さまざまな戦後思想の残響のなかにある。小熊氏の思想史は、自らの無意識を取り出し、そこに構造を与える作業。すなわち、このとらえどころのないポスト戦後の精神を、その起源にさかのぼって再措定する試みであるように思われる。

「語られない戦争体験」を光源におこうとすると、しかし、何らかのかたちでその「語られない体験」を語り起こす必要がある。断片や史料、第三者の記録をつなぎあわせ、小熊氏は『〈民主〉と〈愛国〉』でそれを合成した。それでも、本当にそのとおりの「語られない体験」があったのかと、読者が疑問をさしはさむ余地が残る。

このことを意識してであろう、小熊氏は、知識人本人への聴き取りを行なうことに意欲的だ。「語られない体験」の仮説を、本人の口から裏付ける意味あいがあるのだろう。今回鶴見氏は、進んで自らの戦争体験と思想の歩みについて語り、小熊氏に協力を惜しまなかった。ただし、誰にインタヴューしてもこのようにうまくゆくとは限らないし、物故者にはインタヴューのしようがない。

編集者精神に話を戻せば、本書は、上野氏が〈編集者が三人集まっちゃった感じ〉とのべるような、信頼とチームワークに支えられている。『思想の科学』の編集をしていた鶴見氏は、明治の政治家・若槻礼次郎を訪ね、〈親父なんかとは全然ちがう種類の人間がいる〉と愕然とする。健全だった明治日本が、日露戦争の終わった一九〇五年を境に、「一番病」に変質した。戦後も戦前もこの点では変わらない、この偏狭と卑屈と戦おうと、鶴見氏は奮闘した。だからこそ、同じく戦後という時代の総体を疑う小熊氏の仕事に、同志としての深い信頼を寄せたのであろう。小熊氏と鶴見氏、それに上野氏の編集者精神の共和が、読後感を温かなものにしている。（はしづめ・だいさぶろう氏＝東京工業大学教授・社会学専攻）

46判・403頁・2940円
新曜社
4-7885-0887-7

★つるみ・しゅんすけ氏は哲学者。ハーヴァード大学で学ぶ。京大、東京工大、同志社大で教鞭をとる。著書に「鶴見俊輔座談（全10巻）」「鶴見俊輔集（全12巻）」「戦時期日本の精神史」「アメノウズメ伝」「回想の人びと」など。一九二二（大正11）年生。

★うえの・ちづこ氏は東京大学大学院教授・社会学専攻。京大大学院博士課程修了。著書に「近代家族の成立と終焉」「ナショナリズムとジェンダー」「発情装置」「差異の政治学」「家族を容れるハコ　家族を超えるハコ」など。一九四八（昭和23）年生。

★おぐま・えいじ氏は慶應義塾大学助教授・近代史・社会学専攻。東大大学院博士課程修了。著書に「単一民族神話の起源」「〈日本人〉の境界」「〈民主〉と〈愛国〉」「清水幾太郎」など。一九六二（昭和37）年生。

2004-4-⑤

『文學界』第58巻第9号　p284-286　文藝春秋　2004.9.1発行

「イデオロギーズ」福田和也

「思想全図」を求める切迫した試み

橋爪大三郎

テクノロジー、暴力、自由、信仰、愛。五つの大きな問題系にとりあえず切りわけられた、一九世紀このかたの思想家たちの網の目状のスケッチである。この網の目に捕えられているのは、近現代という巨大な怪物だ。

近現代という巨大な出来事の塊りが、怪物なのは、名状しがたいからである。その出来事の渦巻きのただなかで、いまもわれわれは翻弄されている。そんななかでも、人びとはそのときどきに、それぞれの場所から言葉を発し、思想をのべてきた。そういう言葉を切れ切れにでもつなぎあわせるなら、この出来事の全貌をとらえられるかもしれない。『イデオロギーズ』は、たとえ一人ひとりの思想が偏ったもの（イデオロギー）でも、それらを束ねれば時代の実像に近づくのではないかという、見切り発車のような仮説に導かれた著作である。

《本書は、啓蒙書である。……いかなる高さも、いかなる光も、測るべき尺度も足場もない只中での、啓蒙として。何よりも、自分自身のための、自分の言葉のための、啓蒙。開かれれば開かれるほど、窄まっていき、照らそうとすればするほど混濁する視界のなかでの、啓蒙。世界を解明することの希望が断念された後での啓蒙書としることの希望が断念された後での啓蒙書として。》著者・福田和也氏が「あとがき」でこう語るとおり、本書は、時代の閉塞を超え出るための「啓蒙」の書である。イデオロギー、すなわち《自らが無批判に受け入れてしまっていて、そのことを意識していない諸観念、思想》から自由になり、自分の思索を自分で律することができるようになるためのガイドブックなのだ。

本書を読んでいて、伊能忠敬の「日本全図」のことを想った。摑みがたい全体をとらえるため、足元を踏み固め、測量を重ね合わせて輪郭を描いていく。アーレントとバーリン、カッシーラーとハイデガー、エラスムスとルター、ユングとフロイト、D・H・ロレンスとB・ラッセル、……といった思想家が対（ペア）になって取りあげられる。三角測量のための距離と角度が明確な、対という意味だろう。著者は、さまざまな思想家の位置関係と対立の角度を確認しながら、場所を移っていく。それぞれの思想家に内在する議論を期待すると、肩すかしをくらうかもしれない。何が言いたいのかわかりにくく、読みづらい。けれども、鳥瞰できないものをあえて鳥瞰しようとする、「思想全図」を手に入れようとする切迫した試みなのだと考えれば、本書の書きぶりは納得がいく。この「思想全図」が、どんなに大きな未踏の空白域を残していたとしても、その意義を減ずるものではないのだ。

学生時代に《フーコーやドゥルーズを読んでいた》世代の福田氏が、マルクス主義などの「大きな物語」やイデオロギーにからめ取られていたはずはない。にもかかわらず、福田氏が、自分が意識しない観念や思想にとらえられているかもしれないと考えたことを、私は興味ぶかく思った。ふつう、われわれの生きる時代の閉塞は、ポストモダンとか消費社会とかシステムの自己準拠とかよばれる。それに対して福田氏は、その閉塞を、過去の観念や思想の束縛によるものととらえ、その実態を過去にさかのぼって明らかにしようとした。

その結果、本書は、特異な書物になっている。

この本をどこか読みづらく感じる原因は、著者が何を考えているのか、よくわからないからである。ふつうの書物は、著者が何を考えてきたのかを、読者にわからせようとするものだ。けれども『イデオロギーズ』は、その反対に、著者が何を考えさせられてきたかを、明らかにしようとしている。ふつうの啓蒙書の裏返しである。そこでは、著者が考える代わりに、過去の思想家たちがさまざまなことがらをさまざまに考え、著者はそれに立ち会うだけである。

このような書物を書くのは、実はむずかしい。

まえからはっきり意識していた思想家たちのことや、そこから受けた影響について書くのでは、無意識を明らかにしたことにはならない。かと言って、意識しないことがらを書くことはできない。そこで著者は、まず書き始めてから、ほかの人びとの手による思想史の書物（二次資料）を参照し、そこで発見したことがらを書きとめていくことになる。作業としては、大学生の期末レポートと似てくる。

もちろん学生のレポートでは、書物にならない。書きとめた思想家たちの言論のネットワークが、書いた当人の無意識はもとより、その時代の人びとの集合的な無意識を、みごとにちょうどすっぽり包んでいるのでなくてはならない。少なくとも、そのように人びとを信じさせなければならない。それには、そろそろ人びとに忘れられかけている思想家たちを、注意ぶかく選ぶ必要がある。

こうして『イデオロギーズ』は、近現代がその姿をあらわした、一九世紀から二〇世紀にかけての思想家たちに焦点をあてる。しかもその視線を、西欧に限定する。

近現代の思想の系譜をたどる場合、それが西欧に限定されてしまうのは、『ソフィーの世界』でもわかるように、自然なことだ。けれども、近現代という怪物が現れたのは、西欧に限らなかった。日本を含む東アジアでそれがどんな猛威をふるったか、歴史年表をながめてみるだけでも一目瞭然である。もちろん福田氏はそのことをよくわかっていて、岸信介や石原莞爾のような、昭和の「怪物」たちについての評伝を手がけてもいる。だから『イデオロギーズ』が議論を西欧に限定するのは、話を簡単にするため、あるいは単に書きやすいからだろう。

では『イデオロギーズ』は、どんな場所にわれわれを連れ出すのか。

福田氏がこの書物を構想したのは、おそらく、冷戦が終わりイデオロギーが崩壊したあと、かえって人びとが途方にくれ、どのようにものごとを考えればよいのかの規範を見失っていると考えたからだろう。人びとは、考えなくてもよいことを考えさせられている。その思考のパターンを打ち砕き、人びとの思考を自由にするのが、この書物の目的だ。こういうパターンで君たちは考えてきた、さあ後は勝手に考えなさい、という突き放された感じを、読者は受け取るはずだ。

これでは、人びとはますます途方にくれてしまうかもしれない。

考えるべきことを考えるべきやり方で考える、思考の規範を獲得するためには、イデオロギーから自由になるだけではなしに、自分の拠って立つ価値を選びとる必要がある。価値を選びとるためには、『イデオロギーズ』のやり方とは反対に、自分がなにをどう考えているかをまず書きとめ、その前提へとさかのぼり、さらにその全体を再構築していくという作業が必要になる。こういう作業が不足していることのほうが、むしろ、この時代の閉塞をもたらしているのではないか。

ポスト・イデオロギーの時代に、人びとは価値相対主義の海のなかで、進むべき方向を見失い、しばしば理由のない思考のパターンのなかにとらわれてしまう。これは、おろかなことにみえる。『イデオロギーズ』は、こうしたおろかさに対処する方法――啓蒙――を提案する。けれどもこの方法では、人びとは再び価値相対主義の海のなかに押し戻されるだけだ。この構造を明らかにしたことが、この書物の最大の貢献なのかもしれない。

新潮社　1995円
帯＝テクノロジー、暴力、自由、信仰、愛
――危機に瀕する人間精神のライフラインを
根底から思考し論じ抜く
21世紀の「様々なる意匠」